

G. I. Gurdjieff: *Life Is Real Only Then When "I Am"*

Translation © Plavan N. Go

見本版：一部の抜粋のみ

G・I・グルジェフ

『生は《私が在る》ときにのみリアルである』

Life is Real Only Then When "I Am"

全体とすべて

第三集

【見本版】



G. I. Gurdjieff: *Life Is Real Only Then When "I Am"*

Translation © Plavan N. Go

見本版：一部の抜粋のみ

全体とすべて 三部作

ALL AND EVERYTHING in Three Series

第一集——『ベルゼバブが孫に語った物語』あるいは『人間の生に対する客観的で公正な批判』

第二集——『注目すべき人々との出会い』

第三集——『生は《私が在る》ときにのみリアルである』

すべては、完全に新たなる論理的展開の諸法則にのっとり、以下に掲げる三つの主要な課題の達成をその厳格な目的として書かれた。

第一集——過去の幾世紀にもわたって読者の精神と感情に根を下ろした、世界のすべての事柄についての信念と見解とを、非情にも、いかなる妥協もなしに破壊すること。

第二集——新たな創造のために必要な素材に読者を馴染ませ、その健全さとすぐれた性質とを明らかにすること。

第三集——読者の精神と感情において、現在の彼が知覚するような幻の世界ではなく、現実の世界の、実証可能にして夢ならざる認識が生まれるのを助けること。

G. I. Gurdjieff: *Life Is Real Only Then When "I Am"*

Translation © Plavan N. Go

見本版：一部の抜粋のみ

「私の著作に関心を持つ者はだれであれ、所定の順序に従わずしてこれを読もうとしてはならない。すなわち、先行する著作の内容にじゅうぶんに親しんだうえでなければ、後続の著作を読んではいけない」

(G・I・グルジェフ)

「そして私は第三集で、完全に道理にかなった客観的真理の数々を明らかにしようと思うのだが、この第三集の内容は、第二集の朗読を聴いた人々のうち、私の注意深い指図に基づいて特別な訓練を受けた者たちによって選ばれた人々にだけ開示しようと思う」

(G・I・グルジェフ『ベルゼバブが孫に語った物語』最終章)

G. I. Gurdjieff: *Life Is Real Only Then When "I Am"*

Translation © Plavan N. Go

見本版：一部の抜粋のみ

はしがき

ここに収録した文章は、G・I・グルジェフがその著作の第三集『生は《私が在る》と
きにのみリアルである』のために用意した草稿の断片にすぎないが、彼の親族であるわ
れわれは、私の叔父にあたる彼の願い、「人間の内面の世界について彼が知ったことの
すべてを自分の同類の生き物たちと分かち合いたい」という、本書の序章において強く
述べられた願いに従いたい。

われわれはそうすることで、彼が本書の序章を執筆したときの意図に対して忠実であろ
うとするとともに、彼の教えに関心を抱く非常に多くの人たちの期待にも応えられたと
思う。

(親族代表 ヴァランタン・アナスタシエフ)

G. I. Gurdjieff: *Life Is Real Only Then When "I Am"*

Translation © Plavan N. Go

見本版：一部の抜粋のみ

本書について

ジャンヌ・ド・ザルツマン

「私の最後の本であり、私はこれによって、われらが《共通の父》のお創りになった私と同類の他の生き物たちと、私が偶然に学ぶことになった、人間の内面の世界に関する、かつて知られざる神秘のほとんどすべてを分かち合いたいと願う」

グルジェフは、一九三四年十一月六日に以上の言葉をしたため、すぐに仕事にかかりました。その後の数か月、彼はこの著作のために自分の考えをまとめあげる仕事に完全に没頭しました。

しかし、一九三五年四月二日、彼は突然、執筆を完全にやめました。

人は疑問に思うでしょう。どうして彼はこの段階で企てを放棄し、二度とそれに戻ることがなかったのか。

どうしてこの第三集を未完のままとし、少なくとも見かけのうえでは、その出版の意図を放棄したのか。

グルジェフがその晩年の十五年にわたって展開した集中的なワークにみずから関わった経験がないかぎり、この疑問に答えるのは無理でしょう。そのなかで、彼は一定数の弟子たちのために、彼の教えの直接的で実践的な追求のために必要な条件を日々に創りだしたのでした。

彼は『ベルゼバブが孫に語った物語』の最後のページで、この第三集は「これをもって私が光を当てようと願っている本物の客観的眞実」を理解できるであろう選ばれた者たちだけが読めるようにする」という意図を明らかにしています。

グルジェフは現代人に対して、つまり昔からさまざまな形で指し示されてきた眞実を認識する力を失ってしまった人間、深い不満を覚え、断絶と無意味感を抱いている人間に対して語りかけます。

しかし、そのような人間を相手にして、どのようにしたら、夢と現実を見分けられるだけの意識の鋭さを当人の内側に目覚めさせられるでしょうか。

グルジェフによれば、眞実への接近においては、人間を形作る三つの部分、つまり思考と感情と肉体のどれもが同じ強さで触れられること、それぞれに見合った特定のやりか

G. I. Gurdjieff: *Life Is Real Only Then When "I Am"*

Translation © Plavan N. Go

見本版：一部の抜粋のみ

たで触れられることが不可欠であり、それがなくには人の成長は偏ったものとなり、遅かれ早かれ行き詰まることとなります。この原理をよくわかっていないかぎり、自分を相手にした取り組みのすべては、的はずれなところに向かってしまわざるをえません。基本的な必要条件を正しく理解していないため、ごくありふれたレベルをけっして超えることのない形式的な努力の機械的な反復となるでしょう。

グルジェフは、人生のありとあらゆる状況を利用して人に真実を味わわせる方法を知っていました。

私は彼が人々に働きかける姿を見てきました。自分の指導する複数のグループのそれぞれのなかで理解が育っていく可能性や、それぞれの個人に特有の困難に、彼がどのように注意を向けてきたか。また、まずは知識の特定の側面、次にはまた別の側面へと、とても周到な計画に従って意図的に強調点を移していく彼のやりかたを見てきました。ときには思考に働きかけ、知性を刺激し、まったく新しい見方を切り開きました。ときには感情に働きかけ、そのときは完全な偽りのなさへの即座の要求に応じて、あらゆる作為を手放すことが求められました。ときには、肉体の目覚めと発動、ありとあらゆる要請を前にしての肉体の自在な応答が求められました。

ならば、彼はどのような意図をもってこの第三集を書こうとしたのでしょうか。

彼が本書に与えた役割は、彼の教えのやりかたと切り離しては考えられません。彼はそれが必要となるタイミングを正確につかんで、特定の章や特定のくだりをその場で朗読させることがありました。それは彼の弟子たちに何らかのヒントやイメージを提供し、それによって弟子たちは突如として自分自身に直面し、自分自身の内的な矛盾をあからさまに見るのでした。

これは人を人生から隔離するのではなく、人生のただなかを通り抜けさせる道でした。それはイエスとノーの両方、対立の原理、せめぎあうもろもろの力のすべてを考慮した道でした。みずから闘いに加わりながら闘いの上に立つ、そのような努力の必要性を理解させる道でした。

人は自分が越えるべき敷居のところまで連れて行かれ、そこではじめて、自分には完全な偽りのなさが求められているということを感じるのでした。それは困難な道とも見えたが、そのときにはもはや、自分が後にしたものはかつての魅力を失っているのでした。ちゅうちょする人の目に、グルジェフは、誤った選択をしないためには何を差し出し、何を手放さなければならないかの尺度をみずから体現しているように見えました。

これはもはや、教義をもって教えを知るというようなことではなく、知ることがもたら

G. I. Gurdjieff: *Life Is Real Only Then When "I Am"*

Translation © Plavan N. Go

見本版：一部の抜粋のみ

す身を切るような味わいを知ることでした。

この第三集は、このように未完の著作に留まりながらも、ただみずからの存在をもって人に決断を迫り、自分が何を求めているのか知るようにあなたに求める者、師と呼ばれるにふさわしい者から、どのような作用が生じるのかを伝えています。

彼は死の直前に私を呼び、現状についての彼の認識を私に伝え、いくつかの指示を残しました。

「それにふさわしいときが来たと確信したときに出版しなさい。第一集と第二集を出版しなさい。だが、まず大事なものは、これから生じるであろう要請に応えられる中核の人たちを育てることだ」

「責任を負える中核がなければ、教えの作用は一定の範囲を超えることができないだろう。それには時間がかかるだろう。たいへんな時間がかかるかもしれない」

「第三集は出版しないでもよい。それは別の目的をもって書いた。だが、あなたがある日、これも出版しなければならないと思うようになったなら、出版しなさい」

これで私には課題が明らかになりました。第一集を出版したらすぐ、休むことなく、客観性、献身、みずからに努力を要求する姿勢をもって、すでに生まれた潮流を維持することに貢献しうる、中核となる人たちを集めるという仕事にかからなければならないということです。

G. I. Gurdjieff: *Life Is Real Only Then When "I Am"*

Translation © Plavan N. Go

見本版：一部の抜粋のみ

生は《私が在る》ときにのみリアルである

目次

はしがき

(ヴァランタン・アナスタシエフ)

本書について

(ジャンヌ・ド・ザルツマン)

* * *

プロローグ

イントロダクション

第一の講話

第二の講話

第三の講話

第四の講話

第五の講話

人間にとっての外側の世界と内側の世界

プロローグ

I AM……？ だが、かつては自己想起のただなかでの、まさにこのような自問の瞬間にはかならず私のなかに生じていた、自分自身の全体の全面的な自覚の感触はどこに消えたのか……。

ありとあらゆる自己否定やひっきりなしの自己奮起のおかげで自分の獲得したこの内的な能力が、自分の内的な存在B e i n gに対するその影響力がかってなく必要とされるいまになって、あとかたもなく消えうせるとは？ いや、そんなはずがない！ なにかがおかしい！

もしもこれがおかしくないなら、理性の告げることはすべて疑わしいということになる。

とはいえ、私のなかではまだ、意識的な労働と意図的な苦しみの能力が衰え果ててしまったわけではない！

過去のすべての出来事の結果として、私はまだ在らなければならない。I m u s t s t i l l b e

私は在ることを願い、在ることを意志する！！I w i s h a n d w i l l b e

しかも、私の存在は、私の個人的なエゴイズムのためだけではなく、人類全体の共通の福利のためにも必要である。

じつのところ、私の存在はだれもが必要とするものであり、それは彼らにとって彼らの今日における安楽や幸福よりも欠かせないものだ。

私はまだ在ることを望み、そして在る！！I w i s h s t i l l t o b e I s t i l l a m

私の教示的な著作群の第三集であり、私にとっておよそ最後の著作となるであろうこの本をもって、私は自分が偶然に知ることになった、人間の内的世界に関するかつて知られざる神秘の数々のほとんどすべてを、われらが《共通の父》のお創りになった私と同類の他の生き物たちと分かち合いたいと願うのだが、人間の思考を支配する連想の法則の不可解な働きにより、いまこれを書き始めようとするにあたり、おそらくは時刻まで

G. I. Gurdjieff: *Life Is Real Only Then When "I Am"*

Translation © Plavan N. Go

見本版：一部の抜粋のみ

含めて正確にいまからちょうど七年前、ほとんど錯乱状態にあった私のなかで展開された上記のような自問自答がありありとよみがえってきた。

この異様な独白が私のなかで展開されたのは、一九二七年十一月六日の早朝のことで、私はそのとき、モンマルトルのとあるナイトカフェにいた。私はもう、自分の「暗い想念」によって消耗の極致に至るまで疲れ果て、そろそろ家に帰って、少しだけでも眠れないものか、もう一度、試してみようかと考えていた。

当時すでに私の健康状態はいつも概して悪かったが、その朝はとくにひどい状態だった。

[……]

まったくの話、かつては友人らが言うには「鋼鉄」のようであった私の肉体の各種の機能は、みなしだいに衰え、いまでは慢性的な過労ゆえに、比較的にもとにも働いていると言えるようなものさえない。

これは無理もないことだ……。私の過去の人生が偶然に見せるに至った不可思議なパターンのなかであって、人間の体験の領域において普通ではない出来事の数々のうち、ここではひとつのことだけに言及すると、私にしじゅうつきまどってきたひとつの奇妙で不可解な運命として、私はそれぞれまったく異なる状況のもとで、三回にわたり流れ弾に撃たれ、瀕死の重傷を負っているのである。

それぞれが私の肉体に消し去りがたい打撃を残したこれら三つの事故の重みだけでも、もしも読者がそれを十全に把握できたならば、私はそれだけでも、とっくの昔に最後を迎えていてしかるべきだったと思われるだろう。

この不可解にして運命的な三回の出来事のうち一回目の出来事が起きたのは、希土戦争¹の起きる一年前の一八九六年、クレタ島でのことだった。

[銃弾で撃たれて負傷した]私は、意識不明のまま、正体不明のギリシャ人たちにより、どういうわけか、そこからエルサレムに運ばれた。

¹ 一八九七年の希土戦争。クレタ島のギリシャ系住民の独立運動に端を発するギリシャとオスマントルコの間での戦争。

G. I. Gurdjieff: *Life Is Real Only Then When "I Am"*

Translation © Plavan N. Go

見本版：一部の抜粋のみ

私は意識を取り戻すとすぐ、まだ健康は回復していないというのに、自分と同類の「肥溜めのなかで真理を探る者たち」と連れ立って、エルサレムからロシアへと向かった。それもふつうみんながするように船に乗ってではなく、歩いてである。

[……]

こうしてついにひとりきりになり、資金もひどく欠乏するなか、私は中央アジアに向けて旅立った。

想像を絶する困難と大小の障害を乗り越えて、私はついに、かつて中国領トルキスタンの一部だったヤンギサール¹の町に到着し、そこで旧友の助けを借りて資金を調達すると、七年前に訪れた同じ場所へと向かった。七年前のそのとき、私はその場所で、二度目の流れ弾によって破壊された自分の健康を回復させたのだった。

この場所はゴビ砂漠²の西端にあり、私の心には、われらが惑星の地表上でもっとも肥沃な場所として記憶されている。

そしてこの場所の空気について言うならば、それを吸った万人にそれが及ぼす有益な作用の点で、それはまさに煉獄^{パーガトリ}の空気を思わせた。³

もしも天国と地獄というものがほんとうにあり、そのそれぞれから一定の放射が生じているとするならば、その二つの源泉の間に横たわる空間に生じる空気の味わいは、まさしくこのようであるに違いない。

というのも、この場所の片側には、まさに「豊穡^つの角」から湧き出したような、多様な植物相と動物相と風光に恵まれた土地が広がっているのだが、この肥沃な土地の反対側には、文字どおり地獄を思わせる土地が何万平方キロにもわたり広がっていて、そこにはなにも育たないばかりか、よそから来てそこに迷い込んだ者は、たちまちのうちに命を絶たれ、跡形もなく消え失せてしまう。

¹ Yangihissar (英吉沙)。カシュガルの南方。清朝末期に清朝の支配下からロシアの勢力下に入っていた。

² 現在のタクラマカン砂漠を指す。ゴビ砂漠という地名は、かつては現在のゴビ砂漠とタクラマカン砂漠の両方を指していた。

³ 『ベルゼバブ』第三十九章「聖惑星パーガトリ」参照。一般的な「煉獄」のイメージは該当しない。

われらが地球の表面の陸地の一隅にあるこの小さな風変わりな場所で、われわれの「第二の食料」である空気は、天国からの諸力と地獄からの諸力の狭間で生まれ、変成を遂げるのであり、この場所での一度目の滞在を終える間際、やはりほとんど錯乱した状態にあって、私のなかでは、先に描写したのと似たような自問自答が展開され、まさにこのときの自問自答との関係で、すでに言ったように、十一月六日の晩、私の意識には、そのときにはまったくばかげていると思えたひとつの考えがひらめいたのだった。

[……]

さて、この序章ではもうたくさんのかたちを書いてきたが、それに加え、私を知っている人たちと私を知らない人たち、私の親愛なる友人たちとやはり親愛なる「敵たち」を含め、すべての読者に対して、ほんとうに心から助言しておきたいこととして、私のこの最後の本の内容、とくにその最終章の内容の本質を正しく理解しようと努力していただきたい。

私のこの最後の本の最終章は、「人間にとっての内側の世界と外側の世界」という題名になる予定である。その章は、ふつうには人が考えないようなテーマを扱っているように見えるが、じつはこのうえなく重要な問題を取り上げているのであり、人々の共同的な生の営みのなかで生じる誤解のほとんどすべては、この問題との関係において生じる。

その理解に向けて努力していただきたいと、ほんとうに心からお願いしたい。なぜなら、それによっておそらくだれもが、少なくとも、みずからの生活で生じる無益な心配や感情的な悩みの「静まり」をもたらすものとして下意識においてさえ作用する要因を自分のものとして獲得できるのではないかと思うからである。

[……]

イントロダクション

一九三四年十一月六日

ニューヨーク、コロンバス・サークル、チャイルズ・レストランにて

私が自分の著作の第二集の第三巻の最終章を書き上げるために「うんうん」あるいは「ふうふう」いっている最中にも、私の「下意識における精神活動」、すなわち私のなかで自動的に展開される思考の重心は、次の問題へと移っていた。自分が書くことを誓った第三集の著作群、すなわち私が確信するところによれば、《われらが共通の父》がお創りになった私と同類の生き物たち全員に「啓発的な教え」をもたらす書物としてまもなく知られるようになるであろう著作群をどのように始めたらよいものか？　だが、ここで正直に告白しておくに、予想せずして自分に生じた物理的条件〔自動車事故による負傷〕にもっとも見合ったものとして私が作家の職業を選んでからまもなく、そしてその後、だんだんに身体が回復していく過程においても、私は、自分が個人的に書いたものから、この時代の多くの人々、そして未来の世代の人々が多大な恩恵を受けるであろうことを確信するようになり、ゆえに私は、まさにこれらの著作をもって、自分が生まれ、そして生きてきたことに対する《偉大なる自然》への借りを意識的に返すことに決めた。これは、《偉大なる自然》がそれ自身の大きな目的との関係で人に課すところの役割を自動的に果たすという「ありふれた生」に対する借りというよりも、むしろ意思と意識に導かれた生、公正にみずからの価値を知り、全方面的な完成と独立した統一性へと向かう機会にも恵まれた生に対する借りである。

前からの以上のような考えに基づく結論が、第二集の執筆を終えて意識的に考えたことと結び付き、私は今日、次のように決心した。「啓発的な教え」をもたらすはずのこの著作集の最初の部分で、北米のいくつかの都市への最近の二回にわたる訪問での出来事を描写し、私の教えを学ぼうとする人たちのグループに向けてそのときに私がした話の内容を引用することにしよう。このグループは、十年前、私がニューヨークを初めて訪れたときに結成されていた。

このような叙述から始めることにした最大の理由として、私が特別の配慮をもって練り上げたそれらの講話は、私の最後の著作となるこの第三集をもって私が人々の意識的な生の流れのなかに導き入れようと決心したすべてのものの適切な土台となりうる。それに、これらの講話の背景となる出来事や状況に関する描写を加えたうえで、つまり独自

の形式と順序を備えたこれらの講話はどんな出来事や状況に応えるものだったのかを説明したうえで、これらの講話の内容を公開することは、それから総体として生じる「自動的に作用する要因」ゆえに、ヨーロッパ、アジア、アメリカの何千何万人もの男女を完全な身の破滅から救うことにもつながるかもしれないと、私はほぼ本気で思っている。

第三集の第一巻にあたるこの本では、五つの講話の「精髓」を紹介する。そのうち四つの講話は、一九三〇年の終わりごろから一九三一年の始めにかけて私がしたものである。残りの一つの講話を私がしたのは、一九三一年の終わりごろか一九三二年の始めのことだった。

[……]

著作が完成に近づき、執筆の問題をめぐる内的な気がかりが減っていくと、独自のやりかたで形成を遂げた私の本性は、自分が子供のころに父から教わり、覚えさせられた特定の状態において特別な誓いを立てることで私がこの時期における自分の仕事として引き受けたことと関係のない人生の諸問題に対しても興味を向けることを、「良心の呵責」に似た気持ちを味わうことなくできるようになった。そのような「精神状態」で、第二集の最後の仕上げに取り掛かった私は、以前と同じく、ヨーロッパ諸国、主としてフランスを旅しながら執筆を続け、そして私が執筆の場としたのは常に、レストラン、カフェ、「ダンスホール」といった、現代道德の「寺院」として、人の集まる場所であった。

この時期から、私はありとあらゆる人たちとの関係を一新するとともに、なかば仕事から解放された注意力をもって、そして自分が少年時代に意図的に身に付けた能力として「他者の外面的なふるまいに自分を移入する能力」を使って、ふたたび人々を観察するようになった。そして私が気づいたのは、男であれ女であれ、私の教え^{アイデア}について何らかの^{アイデア}ことを知り、興味を持つようになった人たち全員の精神、とくに私の教えに基づくとされることをすでに自分で試している人たちの精神には「なにかおかしいこと」、観察のこつを知っているならふつうの人でも気づくほど決定的に「まったくおかしいこと」が起きているということであり、私はこうした人たちとの出会いを重ねるごとにこれを確信するに至った。

何度もこれを見るうちに私は警戒を強め、やがて私の精神には、この事実の原因の理解に向けての「やむにやまれぬ知識欲」が生じた。

したがって、その後、前述のような人たちに会うたびに、私は、問題の解明に向けて彼らを注意深く観察し、遠まわしに質問することで、私個人にとって悲しむべきものであるこの不可解な事実のそもそもの原因を探ろうとした。

前述のような人たちと会うたびに、そしてまた、この不可解な事実をめぐる観察の記憶から思いが生じるたびに、私の興味と知識欲は強まり、これはほとんど私の固定観念にまでなった。それと同時に、どうしてもこれについて考えてしまうようになり、それは法則どおりのこととして自分の本性が自分の意識への服従を拒否しようとすることに対抗しての私の日々の内的な闘いをひどく妨害するようになり、したがって最大限の注意力の発動を要する自分の仕事を完全に集中して進めることが難しくなった。

一九三〇年の秋、私はニューヨークを訪れ、そこに着いた最初の日、私の教えの追^{アイデア}究者となったおおぜいのアメリカ人に取り囲まれたときにも、私は彼らを見ていて同じことを感じたのだが、その印象は深く私に突き刺さり、私をひどく動揺させ、これには「クシュカ地方のイエロー・マラリア」の患者に起きるような冷汗と身体の震えが伴った。

私は「彼らの目をほこりで覆う」ために、会話にジョークをはさむいつもの癖をもっと誇張し、彼らとの関係で自分に生じた内的な状態を彼らに知られまいとした。

かなり長い時間がたって、ようやく落ち着きを取り戻した後、私は手短かに状況を吟味して、財務的なことも含めた今回のアメリカ訪問の目的をかなえるには、必ずしもこのグループの人たちに頼る必要はないと判断した。そこで私は決心した……今回の訪問中、このグループの人たちとの個人的な接触を通じて、この独自の精神的異常性が彼らの個人的性格の内部にどのようにしてだんだんに形成されるに至ったのか、その詳細をすべて解き明かさなければならない。そしてそのうえで、私の教え^{アイデア}に関する誤解と他の要因が合わさって生じたものとなかば察せられるこの異常性を彼ら全員ではなくても少なくとも大多数から取り除くために全力を尽くさなければならない。

私はこうして、この訪問の期間中に、あらゆる手立てをもってこの精神的異常性の全側面を解明し、そしてできるなら、それに対抗するためにすべきことをすべてしようと決心したのだが、そのような決心をするに至るまで私が動揺した理由をここで正直に言っておくと、かつてこのグループの人たちは、あの災難に見舞われた後の数年にわたるきつい時期に私に善意を寄せてくれたのであり、その間に私のなかにはだんだんに、彼

ら全員に対する特定の意味での義理を自分を感じさせる「なにか」が育っていたのである。

[……]

人間にとっての外側の世界と内側の世界

The Outer and Inner World of Man

私の最後の著作である本著のこの章で私が扱おうとしているこのテーマは、現代人の思考様式から完全に抜け落ちていることながら、われわれの日常生活で生じる誤解のすべてとはいえないまでもほとんどは、このテーマの意味するところをめぐる無知から生じる。

人間関係におけるほとんどすべての誤解の原因はこのテーマの重要性に関する無理解から生じるのであり、しかもそればかりか、われわれの人生に関わるひとつの大きな問題を解決するための答えも、すべてここに隠されている。

すなわち、このテーマを認め、その意味と意義とを全角度から理解してはじめて、人間の寿命の延長という課題に取り組み、成果を得ることができる。

この問題についてさらに書く前に、人生における例外的な状況のなかで私がまったく偶然に親しむこととなった、ある古文書の一節を引用しておきたい。

私がここでその中身を利用しようと思っている、そのとても古い書きものは、非常に限られた数の人々が世代から世代へと伝える遺物のひとつである。こうした人々を「イニシエイト」[教えの継承者]と呼ぶのだが、ただしこれは最近のヨーロッパで増殖中の自称「イニシエイト」ではなく、本物のイニシエイトである。

彼らは、いまでも中央アジアの辺境に存続しているエソテリックな教団の「イニシエイト」である。

この古文書の文章は、遠い昔のならわしどおり「ポドボリゾヴァニー」として、つまり象徴の形式で、あるいは秘教的科学で言うところの「似たものになぞらえる」という形式をもって寓話的に書かれており、これは現代人のあいだに確立された物事の捉え方の形式とはまるで異なる。

この二つの形式のあいだでの違いをこれも偶然ながら私は熟知しているので、私はこの古文書の一節の意味をできるだけ正確に伝えようと努めはするが、現代人のあいだでいま確立されている物事の捉え方の形式に見合ったやりかたでそれをしようと思う。

この古文書は次のように説いている。

[……]